国立国語研究所学術情報リポジトリ

# The Utility of the "Bibliographic Database of Japanese Language Research" Compiled by the National Institute for Japanese Language and Linguistics



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2015-10-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 中野, 真樹, 渡辺, 由貴, NAKANO, Maki, WATANABE, Yuki<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15084/00000504 |

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 5: 65–76 (2013)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online


# 国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」の有用性

中野　真樹[a]　　渡辺　由貴[b]

[ab]国立国語研究所 研究情報資料センター 非常勤研究員［–2012.09］

**要旨**

今日，先行研究の検索・参照等のために，様々なリファレンスデータベースが作成されている。国立国語研究所は 2011 年に「日本語研究・日本語教育文献データベース」を公開した。このデータベースは日本語学・日本語教育研究の文献に特化している。このような特定の専門分野の文献にしぼって作られている「専門特化型」データベースが，独自の観点から情報の収集・選択・整理を行っているという特性を生かし，多分野にわたる文献をナビゲートしている網羅的なデータベースとともに活用されることが，それぞれのリファレンスデータベース，また，各学界の進展に寄与すると期待される *。

**キーワード：**リファレンスデータベース，「専門特化型」データベース，日本語研究，日本語教育研究，「日本語研究・日本語教育文献データベース」

## 1. まえがき

先行研究の検索・参照等のためには，様々な方法があるが，現在ではインターネットにより，膨大な学術情報が入手可能となっているといってよい。特に，研究の要となる学術論文を中心とした文献については，その書誌事項を検索するための様々なリファレンスデータベースが国内外に存在している [1]。

学術論文の検索の際には，例えば医学・生物学等の分野では「PubMed[2]（米国立医学図書館）」等を利用すれば，国内外の学術論文を検索することができる。日本国内の学術論文については，多くの情報提供機関と提携し，多分野にわたる文献をナビゲートしている「CiNii Articles[3]（国立情報学研究所）」等で検索できる。人文科学の分野では，日本の学術論文を検索する際には，特に「CiNii Articles」が使われることが多い。「CiNii Articles」は採録件数も多く，様々な機能をそなえたデータベースではあるが，一方，特定の研究分野にしぼったリファレンスデータベースも存在している。国立国語研究所が提供する「日本語研究・日本語教育文献データベース」もそれにあたる。このような専門分野に限定する方向のデータベースが，独自の観点から情報の収集・

---

* 本稿は中野真樹・渡辺由貴・早田美智子・横山詔一「国立国語研究所『日本語研究・日本語教育文献データベース』の特徴―『専門特化型』データベースの有用性―」（じんもんこん 2011 年 12 月 11 日，於龍谷大学）および中野真樹・渡辺由貴「国立国語研究所『日本語研究・日本語教育文献データベース』の有用性」（NINJAL サロン 2012 年 6 月 19 日）での発表をもとにしたものである。

[1] 学術論文以外の学術情報検索の方法としては，書籍情報を検索できる「WebCat」（http://webcat.nii.ac.jp/），「NDL-OPAC」（http://opac.ndl.go.jp/），インターネット書籍販売サイト「Amazon」（http://www.amazon.co.jp/），学術資料全般を検索できる「Google Scholar」（http://scholar.google.co.jp/）等がある。

[2] http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/

[3] http://ci.nii.ac.jp/

選択・整理を行っているという特性を生かして発展し，活用されることが，それぞれのリファレンスデータベース，また，各学界の進展に寄与すると期待される。

本稿では，まず国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」（以下本データベースとする）（http://www.ninjal.ac.jp/database/bunken/）の概要を示す。そして，本データベースをリファレンスデータベースのなかの「専門特化型」データベースとして位置づけ，その特長を述べながら，その特性を生かす方向性を模索することで，リファレンスデータベースの展望を考える上での一助としたい。

## 2.「日本語研究・日本語教育文献データベース」の概要

本データベースは，国立国語研究所が作成・提供する，日本語学・日本語教育に関係する学術論文情報検索のためのリファレンスデータベースである。2011 年 1 月に公開された。

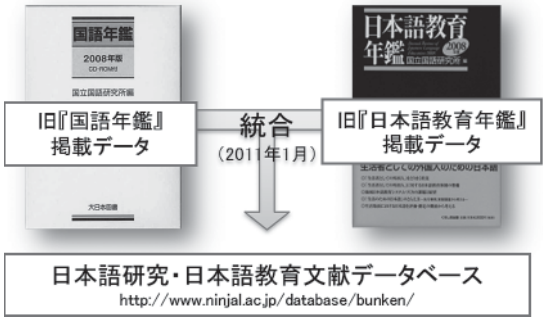


図 1　本データベースのなりたち

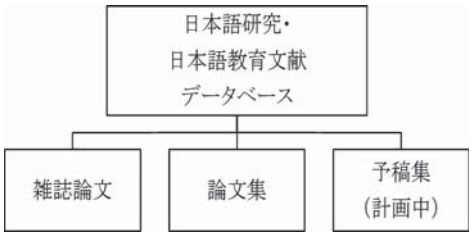


図 2　本データベースの構成

本データベースは，書籍として論文情報を提供してきた『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』のデータを統合したものである。年 3 回程度，新規データの追加更新が行われている（図 1）。

所収データは，『国語年鑑』が 1950 年以降，『日本語教育年鑑』が 1960 年以降に発表された，約 60 年分の論文の情報である。採録された論文原本は，国立国語研究所の研究図書室に配架されている。

『国語年鑑』は日本語学に関する文献情報，『日本語教育年鑑』は日本語教育に関する文献情報を収録したものであったが，両者は関わりが深く，両方の分野に携わる研究者も多い。

両年鑑のデータを統合するにあたっては，重複データを統合・整理するのに加え，公開する項目を追加するなどの充実がはかられている。

「日本語研究・日本語教育文献データベース」は，「雑誌論文データベース」と「論文集データベース」の二つのデータベースを含むものである。簡易検索では両方のデータベースを同時に検索する。詳細検索では，いずれかのデータベースを指定して検索することもできる。今後，予稿集論文のデータベースの追加も検討されている（図 2）。

「雑誌論文データベース」とは，学術雑誌におさめられた論文情報を検索できるようにしたも

のである。2011 年 1 月に公開され，約 17 万 4 千件（2012 年 9 月現在）のデータが掲載されている。

「論文集データベース」とは，論文集内の論文情報を個々に検索できるようにしたものである。書名に「論文集」と入っていないものでも，複数の著者で書かれている学術書のうち執筆担当が目次に示されているものや講座もの等におさめられている論文なども採録している。現在公開されているデータは，『国語年鑑 1994 年版』以降に「刊行図書一覧」に掲載されていた論文集の章の情報をデータとして利用し，論文単位のデータベースとしたものである。2012 年 4 月に約 1 万件のデータが公開された。

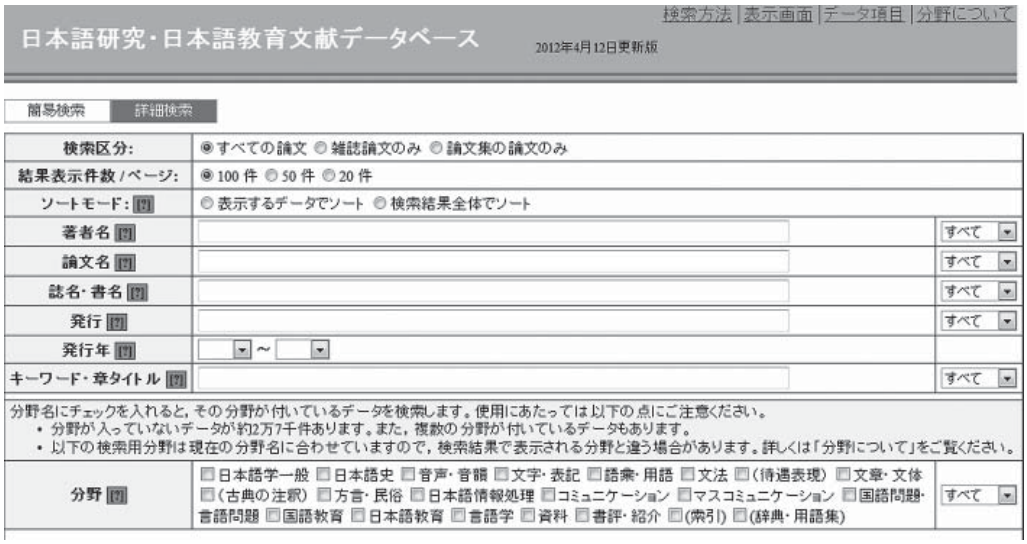


図 3　検索画面

項目の構成は下記のとおりである（詳細は検索画面右上の「データ項目」参照）。

1. DB　2. 文献番号　3. 研究図書室請求番号　4. 著者名　5. 著者名別表記　6. 論文名　7. 論文名別表記　8. 誌名・書名　9. 巻号　10. ページ　11. 発行　12. 発行年月　13. 編者等　14. キーワード　15. 章タイトル　16. 分野

本データベースにおける特徴的な項目としては，以下のようなものが挙げられる。

〈3. 研究図書室請求番号〉

閲覧の利便性のために研究図書室の請求番号が付与されている。

なお，採録されたデータの論文原本は，国立国語研究所の研究図書室にある。ここには，日本語学・日本語教育関連を中心とした文献がおさめられており，また，この分野の学会・研究会とのつながりが強く，寄贈される文献も多い。

〈15. 章タイトル〉

論文名やキーワードからは拾いきれない情報を付与することで，検索の精度を向上させるとともに，その論文のおおまかな内容の把握が可能になっている。

〈16. 分野〉

一定の基準をもとに付与したメタデータである。「文法」「方言」「日本語情報処理」等があり，検索の際の参考情報となる。動向分析にも利用できる。

以下は，検索結果の一覧画面である。

| No. | 一括選択 | DB | 著者名 | 論文名 | 誌名・書名 | 巻号 | ページ | 発行 | 発行年月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | □ | | 影山 太郎 | 動詞の文法から名詞の文法へ | 日本語学 特集:名詞句の文法 | 29-11 | pp.16-23 | 明治書院 | 2010.09 |
| 2 | □ | | 影山 太郎 | 言語の構造制約と叙述機能 | 言語研究 特集:言語構造のインターフェイス | 136 | pp.1-34 | 日本言語学会 | 2009.09 |
| 3 | □ | 本 | 影山 太郎 | 語彙概念構造(LCS)入門 | レキシコンフォーラム 4〈Lexicon Forum〉 | | pp.239-264 | ひつじ書房 | 2008.09 |
| 4 | □ | 本 | 影山 太郎 | 属性叙述と語形成 | 叙述類型論 | | pp.21-43 | くろしお出版 | 2008.06 |
| 5 | □ | | 影山太郎 | 接尾辞「－化」, -ize, -ifyの属性叙述機能 | 人文論究(関西学院大学人文学会) | 57-02 | pp.19-36 | 関西学院大学人文学会 | 2007.09 |
| 6 | □ | | 影山太郎 | 特集:形態論が拓く言語研究の可能性 カタチが伝える、コトバのしくみ——形態論から見えてきた新しい意味機能 | 言語(大修館書店) | 36-08 | pp.24-32 | 大修館書店 | 2007.08 |
| 7 | □ | 本 | 影山 太郎 | 辞書情報と結果述語の含意的普遍性 | レキシコンフォーラム 3〈Lexicon Forum〉 | | pp.131-158 | ひつじ書房 | 2007.07 |

図 4　検索結果一覧画面

検索結果の一覧画面では，おおまかな内容の把握ができるようになっている。さらに，項目名をクリックすることで簡単にソートができ，項目ごとにまとまった情報も得られる。一覧表示画面（図 4）一番左の「No.」欄にある数字をクリックするとデータの詳細画面になり，そのデータのより詳細な情報を見ることができる。また，選択したデータをダウンロードすることもできる。また, 検索結果画面では, 論文集論文のみ「本」のアイコンが表示されるので,「雑誌論文データベース」と「論文集データベース」の両方のデータベースを同時に検索した場合の検索結果画面でも，論文がどちらのデータベースに採録されているかを一目で判別できる。

## 3. 人文科学分野からみたリファレンスデータベースと「日本語研究・日本語教育文献データベース」の位置づけ

以下に, 人文科学分野における学術論文検索のためのリファレンスデータベースについて述べる。

研究においては，先行論文の参照が必須である。そして，被引用件数が論文の質を評価する一つの指標ともなっている。学術雑誌の重要度については, インパクトファクター[4]やアイゲンファ

[4] Impact factor（文献引用影響率）：特定の 1 年間において，ある特定雑誌に掲載された「平均的な論文」がどれくらい頻繁に引用されているかを示す尺度。<http://science.thomsonreuters.jp/products/jcr/support/>（アクセス日：2012/12/10）

クターという指標が有効な研究分野もある。

しかし，人文科学分野では事情が異なり，例えば日本語学のような，日本語で執筆されることが主であり，かつ主要な雑誌であっても基本的にこの指標が使いにくい領域では，論文の重要度が客観的に測りにくい。また，日本語学の分野では，雑誌種別が「大学紀要」とされるような論文もよく参照されている。そのため，その領域内の情報のみをくまなく収集したリファレンスデータベースも必要になる。

本稿では人文科学分野でよく使われているリファレンスデータベースについて，データの掲載範囲の観点から，多くの研究分野を網羅的に採録している「網羅的」データベースと，特定の研究分野を対象として文献を採録している「専門特化型」データベースに分類して考察する。国内で利用される人文科学分野の「網羅的」データベースとしては，「CiNii Articles」（国立情報学研究所），「雑誌記事索引[5]」（国立国会図書館）や「JDreamII[6]」（科学技術振興機構）等が挙げられ，「専門特化型」データベースとしては，「国文学論文目録データベース[7]」（国文学研究資料館）や「東洋学文献類目検索[8]」（京都大学人文科学研究所）等が挙げられる。本データベースも，「専門特化型」データベースに位置づけられる。なお，「網羅的」データベースとはいえ，もちろん，全世界のすべての資料を網羅することは物理的に難しいであろう。例えば雑誌論文という媒体に特化したもの，国内で出された文献に特化したもの，という形でなんらかに特化することにはなる。しかし，ここでは，研究分野では限定せず網羅的に文献を採取しているということで「網羅的」データベースと位置づけておく。

図 5 「網羅的」データベースと「専門特化型」データベース

次に，人文科学分野で利用されるデータベースをいくつか挙げ，その特徴を採録件数の多い順に表 1 にまとめた（2012 年 12 月現在，当該ページで得られた情報による）。

[5] http://opac.ndl.go.jp/
[6] http://pr.jst.go.jp/jdream2/（2013 年 4 月より「JDream Ⅲ」（株式会社ジー・サーチ）として提供開始。http://jdream3.com/）
[7] http://base1.nijl.ac.jp/~ronbun/
[8] http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/publication/ruimoku/

表 1　図 5 掲載のリファレンスデータベースの特長[9]

| | データベース名 | 研究分野による採録範囲の限定 | 件数 | 情報源 | 一次情報へのアクセス |
|---|---|---|---|---|---|
| 「網羅的」データベース | JDreamII | — | 約 6000 万件 | 他機関からの情報 | 一部有 |
| | CiNii Articles | — | 約 1500 万件 | 他機関からの情報 | 一部有 |
| | 雑誌記事索引 | — | 約 1200 万件 | 独自（国立国会図書館） | なし |
| 「専門特化型」データベース | 国文学論文目録データベース | 有（国文学） | 約 49 万 9 千件 | 独自（国文学研究資料館） | なし |
| | 教育研究論文索引・検索 | 有（教育学） | 約 18 万 5 千件 | 独自（国立教育政策研究所） | CiNii 経由 |
| | 日本語研究・日本語教育文献データベース | 有（日本語学・日本語教育） | 約 18 万 4 千件 | 独自（国立国語研究所） | なし（計画中） |
| | 東洋学文献類目検索 | 有（東洋学） | 不明 | 独自（京都大学人文科学研究所） | なし |

「網羅的」データベースと「専門特化型」データベースに大きく二分したが，採録範囲をどこまでとするか，その線引きはそのままそれぞれのデータベースの特長ともなっている。

データベースの規模は数千万単位に及ぶものから，数十万規模のもの，さらには表 1 には掲載していないがごく小規模なものまで存在する。採録を特定の範囲にしぼらない「網羅的」データベースは千万件台になっているが，採録範囲を限定すればその分件数は減る。本データベースは「国文学論文目録データベース」や「教育研究論文索引・検索」等とならび，ある研究分野範囲のデータを採録対象としている。結果としてこれらのデータベースは十万件台の規模となっている。

また，採録範囲を限定した「専門特化型」データベースは，独自の情報源からデータをつくって持っているところが多いようである。例えば，前述のとおり，本データベースでも国立国語研究所の研究図書室から情報の提供を受けている。「網羅的」データベースは，その性質上，他機関から得た情報をナビゲートする形をとることになるが（「CiNii Articles」等），国会図書館のように，独自の情報源を持つ形をとっているものもある（「雑誌記事索引」）。

なお，基本的には文献の書誌事項等，二次情報のみを収録するリファレンスデータベースが多いが，一部，本文とのリンクが設けられることで全文データベースの側面を持ち合わせるものも存在する。

以上のように，人文科学系で使われるデータベースの特長を概観したが，やはり，「網羅型」データベースと「専門特化型」データベースは，性格が異なるものであるといえよう。論文検索の際，採録件数が多く，機能が充実している「網羅的」データベースはよく利用されている。一方，様々な研究機関が独自の情報源をもとにリファレンスデータベースを作成していることも事実である。以下に，このような「専門特化型」データベースとしての本データベースの特長についてまとめながら，「専門特化型」データベースの意義について考える。

[9] データベースによっては，学術論文以外のものも件数に含んでいる場合がある。

## 4.「専門特化型」データベースとしての本データベースの特長

ここでは，本データベースの特長を整理することによって，「専門特化型」データベースの有用性は何かということについて考えてみたい。

### (1) 独自の情報源

本データベースは，情報源に日本語に関する専門図書館である国立国語研究所研究図書室を持っており，所蔵する原論文から直接書誌データを入力している。国立国語研究所はこの分野の学会・研究会とのつながりが強く，日本語学および日本語教育に関する研究文献が多く寄贈されている。なお，本データベースに関しては，国立国語研究所が事業として継続的に雑誌を集めて整理してきたので，過去 60 年程度の論文情報の蓄積もあり（2 節参照），日本語学研究では重要となる長期的な先行研究の概観に一役買っている。茂木（2010）によると,『国語年鑑 2008 年版』掲載の 2007 年発行の大学紀要類に関していえば，約 9% の雑誌は「CiNii Articles」に当該巻号の情報がないとのことである [10]。これに加え，国立国語研究所には，紀要以外にも広く流通していない文献等が寄贈されることもあり，海外の文献に関しても，日本語学に関連するものを収集している。また，上記のような 60 年分のデータの蓄積も含めると，「網羅的」データベースに採録されていない学術論文の件数はさらに多いものと考えられる。

また，学術論文の電子化が進み，電子媒体による一次情報とのリンクが進んでいる生物学・医学分野においても，著作権等の様々な理由から，すべての論文が Web 上からオープンアクセスで全文入手可能となっているわけではない。Matsubayashi ほか（2009）によると，PubMed に掲載された 2005 年刊行の論文のうち，オープンアクセスで全文を読むことができるのは約 27% であったという。2007 年には 42.5% にまで増加しているという報告があるが，これらの論文についても，閲覧できる期間が限られているなどの制約付きのオープンアクセスであるものも含んでいる（倉田 2010: 133–134）。また，学術雑誌の電子化が進んでいるなかでもなお，冊子体での雑誌の閲覧を望む科学分野の研究者も多いという調査結果もある（Hemminger ほか 2007）。

最新の研究を追い求めるとともに，史的研究や学史的研究が重要な位置を占め，過去に発表された論文もさかんに引用される日本語学・日本語教育研究においては，学術論文の電子化の流れを無視することはもちろん不可能ではあるが，電子媒体だけではなく冊子体で刊行された学術文献とのつながりについても，今後も重要視されていく可能性がある。その点，国立国語研究所研究図書室を情報源に持つ本データベースは，論文の検索結果に研究図書室の請求番号を記載するなど，冊子体の学術論文へのアクセスが容易にできるような工夫がされている。これは，日本語学･日本語教育学という専門に特化したデータベースならではの特長であり，「専門特化型」データベースがその専門性とともに,「網羅型」データベースにはない独自のスタイルを獲得していった結果であるといえる。

---

[10] 他の研究分野でも「CiNii Articles」との重複率は興味を持たれており，江草・高久（2011）によると，「教育研究論文索引・検索」の収録論文のうち，重複データは約 6 割であるとのことである。

（2）専門家による取捨選択と整理

3 節で述べたとおり，この研究分野ではインパクトファクターのような客観的な指標が通用しないため，専門分野に関する論文は，各学会等が刊行する学術雑誌･商業専門誌･大学紀要といった掲載媒体にかかわらずくまなく収集することが求められる[11]。研究分野に関わる論文のみが掲載される専門誌の他に，様々な研究分野の論文が掲載される大学紀要等に収録された論文から，日本語学・日本語教育研究に関する論文のみを抽出する必要がある。そのため本データベースでは，専門家が原論文にあたって日本語学・日本語教育研究の観点から収録するものを選択し，同時に研究内容に関するメタデータ（分野）も付与している。

（3）検索の利便性

本データベースには，日本語学・日本語教育に関する文献が選択され，採録されている。多分野にわたって研究されているテーマや機能語に関する研究等, 検索条件によっては「網羅的」データベースでは検索結果が膨大になってしまうことがある。そのような時には当該研究分野の論文のなかから効率的に探すことができる「専門特化型」データベースが有用である。また，付与されたメタデータ（分野）を検索の際の参考情報として使うこともできる。

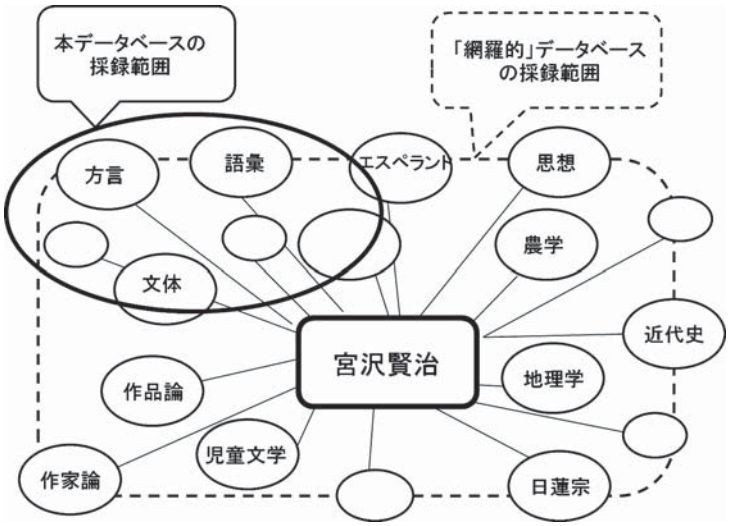


図 6　宮沢賢治研究のイメージ図

以下,「宮沢賢治」を例に具体的に説明する。「CiNii Articles」にて論文タイトルに「賢治」と入力して検索すると, 3648 件（2012 年 12 月 10 日現在）ヒットした。「国文学論文目録データベース」では 2824 件，本データベースは 105 件であった。

[11] 竹内（2012）では，紀要を不要とする動きを紹介しつつも，相次ぐ商業専門誌の休刊などの事情を鑑み，大学紀要の重要性が増しているのではないかという指摘をしている。

「CiNii Articles」は網羅的に様々なジャンルの論文を採録しているので必然的に件数が多くなる。「国文学論文目録データベース」は, 国文学の分野の研究情報を採録した「専門特化型」データベースであり, 宮沢賢治の研究に関してもコアとなるデータベースなので, データ数も多くなっている。これに対し，本データベースは，件数としてはそれほど多くない。しかし，宮沢賢治研究のうち，オノマトペや文体など，言葉の観点から書かれた論文を採録しているので,「宮沢賢治の作品を日本語学的観点から研究したい」等と漠然と研究テーマを探しているような場合，本データベースであたりをつけてみるという使い方ができる。

本データベースではさらに,「語彙・用語」「文章・文体」等の分野情報が付与されており，それらを利用して内容をしぼりこむこともできる。現状では,「網羅的」データベースでは, キーワード検索等を利用して，タームレベルのしぼりこみをすることは可能である。しかし,「日本語学」「日本語教育」のような研究分野を示す語は，論文タイトルやキーワードには出てきにくいため，ある研究分野の範囲で論文をしぼりこむことは難しい。特にリファレンスデータベースの検索に不慣れな初学者や，あらたに学際的研究を行う際や，関係するジャンルの研究成果を概観する場合には本データベースはおおいに参考となる。

このように，既に特定の研究分野でしぼりこまれていることが有益な場合もある。また，採録対象の雑誌の関係で, 他のデータベースには掲載されていないデータが見られることもあるので,「専門特化型」データベースを確認しておくことは意味があるだろう。

(4) 目録としての役目

本データベースでは，2 節でも述べたとおり，必要な文献の一覧をデータでダウンロードできる。また，年ごと・分野ごと等で検索してカスタマイズしておくと，自分に必要な分野の研究目録一覧を作成することもできる。例えば,「2011 年に発表された方言研究」の論文一覧を作る等の利用方法もある。かつて『国語年鑑』『日本語教育年鑑』にあった文献一覧にあたるリストや，さらに加工して，他のシステムで読み込むための業績一覧用のデータを作成する等，各自の目的にあわせて利用できる。

| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 文献番号 | 研究図書室請求番号 | 著者名 | 論文名 | 誌名 | 巻号 | ページ | 発行機関 | 発行年月 | キーワード | 章タイトル |
| 2 | 1000001 | 092 N77 25 | 永田　良太 | 複文発話の構文的特徴と聞き手の言語的反応との関わり―ケド，タラ，カラを中心に― | 日本語科学 | 25 | pp.5–22 | 国立国語研究所 | 2009.04 | 従属節＼主節＼文の階層構造＼あいづち | 1.はじめに　2.発話に対する聞き料と考察対象　4.従属節末と主の言語的反応の比較　5.接続 |
| 3 | 1000003 | 092 N77 25 | 串田　秀也 | 理解の問題と発話産出の問題―理解チェック連鎖における「うん」と「そう」― | 日本語科学 | 25 | pp.43–66 | 国立国語研究所 | 2009.04 | 修復＼理解チェック＼訂正＼言葉探し＼認識 | 1.はじめに　2.研究のコンテクスト の確認　4.試行的訂正・言葉の け入れ　5.認識チェックとその確 |
| 4 | 1000004 | 092 N77 25 | 向山　陽子 | 第二言語習得において学習者の適性が学習成果に与える影響―言語分析能力・音韻的短期記憶・ワーキングメモリに焦点を当てて― | 日本語科学 | 25 | pp.67–90 | 国立国語研究所 | 2009.04 | 言語適性＼言語分析能力＼音韻的短期記憶＼ワーキングメモリ | 1.はじめに　2.先行研究　3.研究 6.まとめと今後の課題 |
| 5 | 1000005 | 092 N77 25 | 田野村　忠温 | サ変動詞の活用のゆれについて・統一大規模な電子資料の利用による分析の精密化― | 日本語科学 | 25 | pp.91–103 | 国立国語研究所 | 2009.04 | サ変動詞＼活用のゆれ＼大規模な電子資 | 1.はじめに　2.国会会議録データ コーパスに基づく分析　4.おわり |
| 6 | 1000007 | 092 N77 25 | 宮岡　弥生；玉岡　賀津雄；林　ヶ情； | 韓国語を母語とする日本語学習者による漢字の書き取りに関する研究―学習者の語彙力と漢字が含まれる単語の使用頻度の影響― | 日本語科学 | 25 | pp.119–130 | 国立国語研究所 | 2009.04 | 漢字＼韓国語母語話者＼日本語学習者＼語彙使用頻度＼音韻 | 1.はじめに　2.漢字文化圏と韓国 4.テストの概要　5.日本語の語彙 に関する分析と考察　6.日韓の |
| 7 | 1000009 | 092 N77 25 | 三井　はるみ | 条件表現の地理的変異―方言文法の体系と多様性をめぐって― | 日本語科学 | 25 | pp.143–164 | 国立国語研究所 | 2009.04 | 方言文法全国地図＼順接仮定条件表現＼体系の多様性＼津軽方言の「バ」＼佐賀方 | 1.『方言文法全国地図』と方言文 表現分野　3.順接仮定条件表現 差　4.青森県津軽方言の順接仮 方言の順接仮定条件表現　6.方 |

図 7　検索結果一覧ダウンロード画面

さらに，このように作った目録を，学界の動向分析等にも利用できる。山崎（1990）や斎藤・新野（2002）では，本データベースの元となった『国語年鑑』のデータに対する動向分析を行っている。『国語年鑑』でも 2003 年版から 2009 年版（2009 年版は WEB での公開）において，その年に出た日本語研究文献を数量的に扱い，分野ごとの比率をみたり，経年的な動きをみたりしている。今後は本データベースを利用して動向分析を行うことが可能である。

また，それと関連して，展望号を書くときの参考資料としても貢献できる。展望論文の執筆の際には，基本的にその分野の論文を全体的に見通す必要がある。しかし上述のとおり，「網羅的」データベースでは日本語学だけ，日本語教育だけ，というように研究分野でしぼることは不可能であるので，「網羅的」データベースしか使えないと，執筆者にとっては大きな負担になる。例えば，膨大な情報のなかでの検索漏れの危険性や，不必要な情報の整理の煩雑さが考えられる。本データベースは既に専門家による選択が行われており，1 年あたりの採録件数は 4000 件程度で，ノイズも少ないので，検索や一覧作成の際の負担は軽くなっている。実際，関連学会の展望号執筆の際にもデータが利用されており，国立国語研究所の研究図書室に原論文を確認にくる執筆者も多い。

このように，特定分野に限定したデータベースであるので，検索目的で使用するだけではなく，当該分野の研究一覧としての価値もある。

（5）専門性を生かした連携

「専門特化型」データベースとして，上記のような特長を持つ本データベースは，その専門性を生かした発展の方向性が検討され，進行している。例えば，専門に特化したデータベースという視点から，その専門分野の研究に必要な他のデータベースとの横断的な検索を目指すことも可能である。

例えば，国立国語研究所では，国立国語研究所が所属している人間文化研究機構の資源共有化システムとの横断検索が実現した。

また，「網羅的」データベースにはない，学会との緊密な関係も強みである。現在，旧国語学会の学会誌をデータ化した「『国語学』全文テキストデータベース」掲載論文について，その PDF と本データベースとにリンクを設ける計画も進んでいる。また，データ整備に関しても，ユーザーからの声が届きやすい。

## 5. 終わりに―リファレンスデータベースの将来とその可能性―

これまで，人文科学分野でよく利用されているリファレンスデータベースについて，そのデータベースが専門性を持つか持たないかという観点から，「専門特化型」データベースと「網羅的」データベースとに二分した。論文検索の際，採録件数が多く，機能が充実している「網羅的」データベースはよく利用されている。しかし，4 節で述べたように，本データベースをはじめとする「専門特化型」データベースにはその専門性を生かした特長があり，その学界に根ざして活用されている。リファレンスデータベースが一つの「網羅的」データベースに収斂されていくという方向

で十分とは言えないだろう。各研究分野で「専門特化型」データベースが整備され,「網羅的」データベースとともに，目的に応じて使い分けられることがユーザーにとって望ましいと言えるのではないだろうか。

また，本稿では，本データベースの位置づけを説明するため，リファレンスデータベースを「専門特化型」データベースと「網羅的」データベースに便宜上二分したが，この分類にはとどまらない様々な特徴を持つリファレンスデータベースが存在する。例えば，専門研究分野を持つデータベースのなかには，個人で作成している数十～数千件規模のものもある。また，一部編集にユーザーが参加する形をとるデータベースもあり，今後データベースは多様化していくことも考えられる。「専門特化型」データベース,「網羅的」データベースにかかわらず，個性豊かで良質なデータベースが共存することによって，データベース相互の情報提供や横断検索等も可能となり，それぞれのリファレンスデータベースが活性化するだろう。

そのなかで本データベースは，日本語研究・日本語教育研究の「専門特化型」データベースとして，4 節で挙げたような特長を持っている。その一方，採録範囲が限定されているため，学際的な研究をしたい際などは，必要な情報をかならずしもすべて得られるとは限らない。また，一次データとのリンクが整備されていない等の課題もある。一次データの掲載については，オープンアクセスの議論が進む海外においても，出版社の許諾等様々な問題があり（時実 2009 等），これらが容易に解決されるとはいい難い。これらの課題についても，学界との連携を強化する等,「専門特化型」データベースならではのアプローチで補っていくことが可能であろう。今後はさらに，海外のデータベースの状況も鑑みつつ [12],「専門特化型」データベースの持つ特長を生かした発展をすることでリファレンスデータベースとして充実していくこととなるだろう。

## 参照文献


江草由佳・高久雅生（2011）「教育研究論文索引と CiNii の重複率」『情報知識学会誌』21(2): 123–130.

Hemminger, Bradley M., Dihui Lu, K.T.L. Vaughan and Stephanie J. Adams (2007) Information seeking behavior of academic scientists. *Journal of the American Society for Information Science and Technology* 58(14): 2205–2225.

倉田敬子（2010）「オープンアクセスとは何か」『情報の科学と技術』60(4): 133–137.

Matsubayashi, Mamiko, Keiko Kurata, Yukiko Sakai, Tomoko Morioka, Shinya Kato, Shinji Mine and Shuichi Ueda (2009) Status of open access in the biomedical field in 2005. *Journal of Medical Library Association* 97(1) : 4–11.

茂木俊伸（2010）「日本語研究論文情報の電子化の実態と論文検索スキル」『鳴門教育大学ジャーナル』7: 9–14.

斎藤達哉・新野直哉（2002）「『国語年鑑』に見る分野別文献数の動向―1985 ～ 2000 年の雑誌掲載文献」『日本語科学』11: 135–144.

竹内比呂也（2012）「大学紀要というメディア：限りなく透明に近いグレイ？〈特集〉灰色文献」『情報の科学と技術』62(2): 72–77.

時実象一（2009）「オープンアクセス：機関リポジトリの最近の動向」『情報の科学と技術』59(5): 231–237.

山崎誠（1990）「『日本語研究文献目録・雑誌編』にみる国語研究の動向」『国立国語研究所研究報告集』11: 169–204.


[12] 例えば，韓国の国立国語院の作成する『국어 연감』（http://www.korean.go.kr/09_new/data/kyear_list.jsp）も参考となろう。

# The Utility of the "Bibliographic Database of Japanese Language Research" Compiled by the National Institute for Japanese Language and Linguistics

NAKANO Maki[a]　　WATANABE Yuki[b]

[ab]Adjunct Researcher, Center for Research Resources, NINJAL [–2012.09]

**Abstract**

Currently, various reference databases are being constructed and utilized to search for and refer to published research. In 2011, the National Institute for Japanese Language and Linguistics went online with its "Bibliographic Database of Japanese Language Research," which covers literature in the fields of Japanese language and Japanese-language teaching. Such databases, focusing on particular fields and incorporating information carefully selected by experts, complement the comprehensive databases that cover a wide range of academic disciplines, and should play a significant role in the future, both in the specific development of reference databases and in academic endeavors in general.

**Key words:** reference database, specialized databases, studies in the Japanese language, studies in the Japanese-language teaching, "Bibliographic Database of Japanese Language Research"